

# ビルマ

## 北ビルマ戦闘記

佐賀県 嘉村 甚次

我が第十八師団はビルマの最北端ともいえる地帯に進出した。インパール作戦開始の五か月前のことだった。

ちょうどこの地域は、英印軍がレド公路打通のための大作戦を起こしていたところである。日本軍はその事実も知らず、インパール作戦を展開したわけだが、我が十八師団一個師団は、絶対制空権を持つ敵数個師団を相手に昭和十九年六月末まで悪戦苦闘したのである。

フーコンにおける師団の損害は

戦 死 約三二〇〇人

戦傷病死 約一八〇〇人

合計 約五〇〇〇人（公刊戦史による）

右数字は病気や負傷で戦場を去ったものは含まれていないので、実際は一万人以上の損害があった。となっている。

我々は昭和十八年十月末ごろ、師団後方基地サモールに到着した。雨期の明けた北ビルマは毎日すごい朝霧が立ち込める。そのなかを「ポテンカトン」という所まで行軍し、しばらく休憩の後、サモールに引き返し、前線輸送用の弾薬、糧秣、燃料等の貨車からの荷降ろし、輸送作業に従事させられた。

降ろして疎開させたつもりの資材は空から見れば一目瞭然だ。そこをカーチスP40、ノースアメリカンP38等々の敵の飛行機は、思いのままに銃撃、爆撃を加え、あっとい間に火の海となり、枯草とともに燃え上がる。ガソリンに命中したのか、ドラム缶は見えなくなるまで空高く飛び上がり、やがて落ちてきてまた火の海は広がる。

くそつ、負けてたまるか、今に見ておれ。

壕に入って上空をにらむ。何回目かのP40が頭上に来た。悔しくってしょうがない。持っていた三八銃の引鉄を無意識に引いた。銃弾は見事にはずれってしまった。残念だ。飛行機が去った後、古年兵に呼ばれた。

「貴様弾撃ったろう」「ハイ、悔しくて、黙っておれませんでした」「馬鹿野郎。当たるもんか。それより敵機に位置を知られたら、余計危ないじゃないか」というが早いか、ポカン、ポカン、ポカンと殴られた。

飛行機の爆撃よりこの方がよほどこたえた。飛行機の銃撃や爆撃で死ぬ奴は、馬鹿か気狂いだ、と、少々度胸がついてきていたところのことだから「この卑怯者」と殴り返してやりたかったが、そうもゆかぬ。ぐっところえる。

一体、戦場のような極限の状態では、人間の姿は二つに分かれる。極端な卑怯者と、回を重ねることに落ち着いてくる者である。もちろん中間もある。飛行機の銃撃角度も分かってくる。壕をそれに合わせて、疲れないように、なるべく浅く掘る。これが「たこつば」のこつで

ある。深く掘りすぎて、近所に爆弾が落ち、地面が揺れて両方の土壁が崩れ、生きながら埋葬された奴もいた。

敵機の銃、爆撃は悔しくて仕様がな。でも十二月二十八日から三十一日までの四日間は、友軍の二式戦闘機四機が上空を旋回してくれたお蔭で、この間は敵は一機も来なかった。ところが一月一日の午後になったらもうP40がやってきた。

友軍機がいさえすれば、戦は勝てるのに。友軍機の精鋭振りを感じると共に、現状への口悔しさと腹立たしさをどうすることもできない。このままでは「菊」の精鋭もどうなるか。そんなとき幹部候補生受験の命令が来た。「ソソカ」という所で、銃撃、爆撃の中に受験した。

「兵科の、たとえ新品少尉でもなんでも、この苦闘の中に一死御奉公申し上げるのだ」と覚悟を新たにする僕であったが、たしか十九年二月十一日ごろであったろう。小生に下された命令は技術幹部候補生。ああ何たることか。生死を考えるなら生きる確率は兵科にくらべて高いかもしれない。でも技術部員などになるくらいなら、何のために大刀洗航空廠を中途退職してこの歩兵五十六連

隊を血書歎願したのか、俺には兵科の将校が一番適しているはずである。死生論するに足らず。御奉公だ。試験官のもとに行つた。試験官は「命令に変更はない」と申される。万事休す。「兵科の甲幹と行をともし方面軍司令部にいたり、方面軍司令部にて新たな命令を受けよ」僕はフーコン地域ワローバンまで進出したが、三月五日を以て師団をはなれ、モガウン、ミートキーナ、バーモ、ナンカン、ワンチン、ラシオ、マンダレーを経てラングーンに至り、方面軍司令部に出頭。

「ビルマ方面軍野戦兵器廠に至り教育を受けよ」と命ぜられ、その結果、陸軍技術部甲種幹補生を拜命するとともに東京兵器行政本部幹補生隊派遣を命ぜられた。やれやれだ。兵科を志望したのにと、身も心も千々に乱れ夢遊病者のような、蟬の脱殻のような空しい気持をどうすることもできず、運命の潮に流されてゆく。

戦友も先輩も北ビルマのフーコンの戦野に草むす屍と消え失せているであろうに、命令とはいえ、現在の自分はただ申し訳ないの一語につきる。

年月日を記したいが記憶がさだかでない。残念だが止

むなく行動のみを記す。前任の故に方面軍司令部と学校との間の打合せに明け暮れ、ミンガラトンの空港からタイ国のドムアンに飛び、やがて昭南に着いた。そこへ南方軍の技幹が二十数人集まった。なつかしい。集まった場所はわが師団が、シンガポール攻略戦の最終段階で攻略したケッペル兵営である。各部署への連絡も終わりやっど一息ついて乗船予定も三日に決まった。やれやれという気持とともに「ホッ」とした気のゆるみがあったであろう。

そんなとき兵站宿舎の一隅にある映画館に入った。「女性航路」という映画が上演され、高峰三枝子主演で、僕たちが出征した後制度化されたいらしい学徒出陣の大学生の弟を送る、姉弟の情愛の描写を中心とした映画であったように記憶する。

今こうして自分は映画など見ているが、ビルマの戦場では、想像もつかない死闘が展開されているのだ。軍隊というところはなんと矛盾だらけの組織か。

軍紀は軍隊の命脈なり。戦場至るところ境遇を異にしかつ諸種の任務を有する全軍、そして、上は将師より下

は一兵に至るまで脈絡一貫よく一定の方針に従い衆心一致の行動につかじめ得るもの、即ち軍紀にして云々、とある。自分も理性では分かっている、また今の環境にありながら前線の苦しさを思い、分かっているけれども映画を見つつ名状し難い感情を抑えることができなかつた。

そうしているうち突然全身が「ブル、ブルツ」と震え、熱が「カツ」と出た。ああマリアだ。ぐっと汗が出てきた。築柴山の下にある医務室に行く。キニーネを貰って服用した。なに、マリアごときに負けてたまるか。

僕は気合いは十分だ。たとえ技幹に落ちぶれてでも・・・。「女性航路」なんていう映画を見た罰だ。戦友、先輩は死んで逝ってるのに、と自分で自分を責めながら兵站宿舎に横たわった。

「貴様はマリアだ。乗船しないで治療した方がよくはないか」と戦友がひやかす。

「マリアなんて病気のうちに入るかい。第一線の苦勞を思ってみろ。一時も早く学校を終えて、『菊』に帰らねば申し訳立つか」

「貴様相変らずだ。その意気だとマリアも案外早くなおるかもしれん」

「有難う。なに、頑張り抜くさ。俺の墓場はフーコンだ。この体はフーコンの墓場から抜け出した亡霊だよ。これ以上参ってたまるかい」

こんな調子で足もとをふらつかせながらケツペルハーバーの岸壁まで歩いた。岸壁にはもう乗船予定の各グループの人員が溢れんばかり。一番心配と同情を禁じ得なかつたのが、ビルマからの担送患者である。行動不能の傷病の体を担架の上に横たえ、バンドで安定させている。衛生兵がその間を行ったり来たりして乗船の段取りに忙しい。患者はすべて衛生兵まかせ。あの勇猛だった兵も傷ついた体を如何せん。だれか知人でもと思って、七、八〇人と思われる人々の間をそれとなく回ってみたが、知人は見つからなかった。

患者たちは三番船倉の中に静かに運び込まれて行く。こちらを見上げながら、中には傷口が痛むのであろうか、口元をゆがめながら無言、瞑目の姿がある。戦い抜きし幾山河の苦闘の思い出が、走馬灯のようによみがえって

来ることであろう。今この船に乗り込むに当たっては、故郷の親の、妻の、子の、恋人の、家の、田畑の、職場の、ありとあらゆる事象が担架の上に横たわる身の不由と思ひ合わせて、全く筆舌につくし難い悶々の思いに胸がいっぱいであろう。これに比べれば僕のマリアや脚氣くらいはまだまだ。タルミ病だ。

御遺骨もまた幾十柱か、白木綿の布に包まれて船橋後部に祭壇を設けて安置されている。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、心で合掌。

こうゆう状態の中、突然女性の団体が現われた。見るところ看護婦さんではない。だとすると何だ。ああそうだ。龍師団のワンチン、ラングンで見かけた慰安婦の人たちだ。わが菊師団では僕は見掛けなかった、外の部隊にはいたことが書いてある。人様々、部隊様々。慰安婦などと申して戦の影の部分を見せつけられた候補生は、皆口には出さぬが複雑な感情を込めて眺めただろう。

いよいよ我々候補生が乗船する番だ。候補生などといえは聞こえはよいが、こんな場合、どうせ冷飯組である。開戦当時日本軍によって捕された貨客船で日本名を長

崎丸とかいった。一万屯クラスの船で、客室などジュウタンを敷いてある。しかしそれを横目に見て、吹きさらしの船橋で宿泊。一週間分の携帯食と水筒の水を持ち、携帯天幕と毛布を敷き詰めて寝る。スコールが来れば風向きではびしょ濡れ。降らねば涼味良好。特等席の気分か。しかし、どうもこのごろは「ボカチン」が大流行だから、それを食えば、わが二十三歳の生涯も一巻の終わりかも知れない。船は帆まかせ帆は風まかせ。僕はお船の運まかせ。突然こんな気持が湧いてくる。

四日くらい過ぎたかな、多分カムランの沖をすぎて北上中の夜半、突然右舷のはるか沖に火の玉があがった。ドーンという火柱がのびる。火柱を中にして艦が二つにポッキリ折れた。そしてあたかも狸の泥舟のように、スーッと消えてなくなった。時間にしたら幾十秒か。とても一分とはたたなかった。

「やられたぞ」誰かが叫んだ。しばらくして、また同じような方角にまた火柱、今度は二本煙突の艦だ。今度は轟沈ではない。燃えている。その手前を輸送船の影がゆく。

次はこちらの番だろう。うるさい艦をやっつけてしまえば後はウサギのような輸送船。その夜は幸い他の船がやられ、わが船は助かる。

今夜はいよいよこの船の番だと覚悟を決める。二十時半ごろ「ビリビリ」と来た。やられた。船は全速で走っている。しばらくは大丈夫だ。三番船倉に音がする。ふと見ると、横腹から、ものすごい勢いで水が噴出する。ビルマからの担送患者の船倉だ。正に地獄だ。どうすることもできない。船足は次第に遅くなり、悲しい汽笛がなり響く。やがて船尾から次第に海水に洗われる。ほとんど停止しかけた。

「飛び込め」候補生仲間は一斉に飛び込んだ。中に金槌が数人いた。これはカポークのお蔭で浮いたので泳げるやつが引張った。随分泳いだつもりが、実際は二、三〇分くらいのものであったろう。ふと振り返ると船は立っていた。そして「スーッ」と海に消えて行った。船をはなれきれなかった人々を呑みこみながら。壮者も患者も御遺骨も慰安婦たちも皆海の藻屑となり果てた。幾人かが十八時間くらい後、海防艦に救助され二日かかっ

て海南島の三亜にたどりついた。

## ビルマ作戦の思い出

### 包囲された将校斥候

福岡県 下川真三

召集令状という夢にも思ったことのなかったハガキを受け取ったのは五〇年前の宵、会社の宴会で、飲み、食い、騒いでいた時であった。何のための宴会であったかは覚えていない。

一瞬酔いが冷めて、いそいで下宿に帰り、身辺の整理を深夜までしたが、不安と興奮で眠れず、朝を迎えたことを覚えている。

駅頭で会社の楽隊の勇ましい音楽、技師長の音頭による万才の声、のぼり、日の丸の小旗の波に送られ車上の人となる。

上津荒木の民宿で、はじめて会った二人の戦友、生まれて初めてさわる軍馬との対面。慌ただしい実戦訓練、